

## 卓球に関する意識調査

勝 健真 朴 永晃

本研究の目的は、卓球に対する関心や卓球の魅力などに関する意識及び実態を明らかにし、卓球の普及につなげていくことであり、大学生を対象に卓球に関する意識調査を実施した。結果として、対象者の約50%が卓球に対する関心を持っており、リオオリンピックでの卓球番組についても全体の約75%の人が、観戦したと回答していた。さらに、実際に卓球をした印象について、約70%の人が「おもしろかった」と回答している。しかしながら、中学校や高校と比較すると、小学校における卓球の授業や、特別活動における卓球クラブが少ないということが明らかとなった。今後卓球人口の増加を考える上で、小学校のときから卓球に触れる機会を増やすことが重要であるということが考えられる。また、卓球の魅力について、「ラリーが続いた時」に最も楽しさを感じるという回答が多かった。この結果から、初めて卓球に触れる人に対して、卓球の魅力を伝える方法として、ラリーを続けさせることが、重要な要因の一つであるということが明らかとなった。

### 【緒言】

現在、日本では様々なスポーツが存在し、多くの人々がスポーツに携わっている。そして、それぞれのスポーツの人口は、必ずしも平均化されておらず、スポーツによって大きな差がある。そこで本研究では卓球を取り上げ、卓球というスポーツに対して、どのようなイメージを抱いているのかを明らかにし、卓球の普及を目指す。

卓球は19世紀後半にイギリスで生まれ、1988年のオリンピック大会に正式競技として採用されて以来、世界各国政府やスポーツ機関の注目が高まり、発展してきた。また卓球は、心身の健康、レクリエーション、自己表現、チームワークの精神などの文化的価値も持っており、子供から高齢者に至るまで、幅広い年代の人に愛され、誰もが楽しめるスポーツである。さらに卓球は世界的に見ると、競技人口がかなり多いスポーツであり、国際卓球連盟には220の国・地域が加盟しており、この数は全スポーツの中でも上位であるといえる。また、現在の世界の卓球の競技人口は約3億人で、日本では30万人と言われている。また競技スポーツではなく、遊びやレジャーと

して行っている人口を含めると世界では8億人、日本では100万人いると言われており、この数は全世界の10人に1人は卓球をしているという計算になる。このようなことから、卓球は「するスポーツ」としては定着しつつあると言える。

現在卓球競技は、中国が数々の重要な大会で優勝を獲得し、世界の頂点に立ち続けているため、中国の卓球はマスメディアが高い関心を寄せるスポーツのひとつとなっている。一説によると中国では競技として卓球を行っている人口が3000万にいたと言われており、愛好家は2億～3億人ともいわれる国民的スポーツである。そのため国内での競争は熾烈を極め、代表を外れた選手たちは国外に移住し、新しい国の代表になって国際舞台に登場してくる。その結果、世界選手権ではシングルス1回戦を終えると、勝ち残った半数は中国代表と元中国人選手であり、近年では中国選手が世界中で活躍している。

このような状況の中で、日本選手が中国選手に勝つために様々な方策を検討しており、そのひとつが競技人口を増やすということである。競技人口を増やすためには、日本の人々が卓球に対して関心を持ち、卓球に触れる機会を増やすということが必要である。そのためには、「するスポーツ」としての観点だけでなく、「見るスポーツ」としての観点も考慮に入れた戦略を検討していくことが重要である。

現在卓球は、「見るスポーツ」として考えた場合、野球やサッカーなどと比較すると、まだまだ普及しているとは言いがたい。しかしながら、近年卓球は、「見るスポーツ」の視点にも力を入れており、例えばラリーが続くようにするためにボールの直径を38mmから40mmに変更したり、観客によりスリリングな試合を見もらうために、21点制から11点制に変更したりするなど、「見るスポーツ」としての卓球の普及に取り組んでいる。そして、最近では、2012年のロンドンオリンピックで女子団体が銀メダルを獲得したことを皮切りに、世界卓球や2016年リオオリンピックでもメディアに取り上げられ、卓球に注目が集まるようになってきた。実際、日本卓球協会の登録人口推移を見て見ると、2011年は304,620人だったのに対し、2016年では327,123人に増え、今年度は333,567人と年々増加傾向にあり、今後卓球人口の増加が期待できるといえる。

以上のことから、今後日本の卓球が普及してくためには、卓球人口が増加していくことが重要である。そして、卓球人口の増加には、一人でも多くの人が卓球に触れ、

卓球に関心を持ってもらい、卓球の魅力を伝えていくことが重要な課題であると考えられる。したがって、本研究の目的は、大学生を対象に、「するスポーツ」と「見るスポーツ」の両方の視点を考慮に入れて、卓球に対する関心や卓球の魅力などに関する意識及び実態を明らかにし、卓球の普及につなげていくことである。

## 【方法】

### 1. 調査対象

大阪経済法科大学の在学生及び近隣の他大学の学生で、運動経験のある学生やない学生など、様々な学生を対象とした。対象学生は192名で有効回答数は188票（有効回答率97.9%）であった。

### 2. 調査期間

2016年10月3日～12月5日

### 3. 調査内容

本研究では質問紙調査を用いた。本質問紙は原則的に無記名で行われた。また、各調査対象者のプライバシーが漏洩することは一切ないことが、ここでは改めて記載されている。質問紙の作成にあたっては、平田（2000）を参考に作成を行った。本調査で用いた質問紙は、別紙資料の『卓球に関する意識調査』の通りである。

## 【結果と考察】

結果と考察は、以下、質問項目の配列にしたがって行う。

### 1. 卓球に対する関心

表1は卓球に対してどの程度関心があるかを示している。サンプル全体では「少し関心がある」が30.9%（58名）で最も多く、次いで「大変関心がある」が19.7%（37名）、であり、半分を示している。一方、「全く関心がない」が17.6%（33名）、「どちらでもない」が17%（32名）、「あまり関心がない」が14.9%（28名）」であった。この結果、卓球に関心がある人は、全体の約50%を占め、関心がない人は約30%であった。またどちらでもないと回答した人が、約20%いるということから、この層の人たちに関

卓球に関する意識調査（勝・朴）

心を持ってもらえるためにはどうすれば良いかを考えていく必要がある。

表1 卓球に対する関心

大変関心がある	37 (19.7)
少し関心がある	58 (30.9)
どちらでもない	32 (1.7)
あまり関心がない	28 (14.9)
全く関心がない	33 (17.6)

注) ( )内は比率(%)表す。

## 2. 卓球(卓球部)の有無

表2は、年代毎で卓球に触れる機会があったのかを示したものである。小学校の体育授業に卓球があったかという質問に対して、「なかった」が56.4% (106名)で最も多く、次いで「あった」が28.7% (54名)、であり、85%を示している。「覚えていない」と答えた人が14.9% (28名)であった。続いて、小学校の課外活動(特別活動)に卓球クラブがあったかという質問に対しては、「あった」が43.6% (82名)で多く、次いで「なかった」が36.2% (68名)、「覚えていない」と答えた人が20.2% (38名)であった。そして、中学校の運動部活動に卓球クラブがあったかという質問に対して、「あった」が66% (124名)で最も多く、次いで「なかった」が23.9% (45名)、「覚えていない」と答えた人が10.1% (19名)であった。最後に、高校の運動部活動に卓球クラブがあったかという質問に対して、「なかった」が18.6% (35名)、「覚えていない」と答えた人が8.0% (15名)であった。

これらの結果を踏まえて、年代が上がるごとに卓球に触れる機会は増えているのがわかるが、小学校の体育の授業で卓球の授業があると答えた人が全体の約30%であり、

表2 卓球(卓球部)の有無

	あった	なかった	覚えていない
小学校の体育の授業	54 (28.7)	106 (56.4)	28 (14.9)
小学校の時の課外活動(特別活動)	82 (43.6)	68 (36.2)	38 (20.2)
中学校の運動部活動	124 (66)	45 (23.9)	19 (10.1)
高校の運動部活動	138 (73.4)	35 (18.6)	15 (8)

注) ( )内は比率(%)表す。

課外活動においても約45%であるということから、卓球に触れる機会が他のメジャースポーツと比較すると、低いということが考えられる。近年スポーツの低年齢化が進んでいるため、小学校の時からもっと卓球に触れる機会を増やしていくことが、卓球人口の増加につながると考えられる。

### 3. 卓球の印象について

次に表3は、これまでの体育の授業やクラブ活動などで卓球を行ったことがある人に対して、卓球をやったどのよう感じたかを示したものである。その結果、「まあまあおもしろかった」(39.6%)、「すごくおもしろかった」(31.0%)と答え、約70%が卓球を面白いと感じたことがわかる。一方、「全くおもしろくなかった」が8.6%、「あまりおもしろくなかった」が5.3%であり、約14%が卓球に対して魅力を感じなかったようである。さらに「どちらでもない」というのは、卓球に対して特に興味を抱かなかったということが考えられる。つまり卓球を肯定的な感情を持っていないということが考えられるため、この15%を加えると、約30%の人が卓球を行ったが、楽しいと感じなかったということを示している。このことから、卓球指導において導入段階の指導をどのように行えば、1人でも多くの人が卓球に興味を持つことができるかをさらに検討していく必要がある。

表3 卓球の印象

すごくおもしろかった	31.0%
まあまあおもしろかった	39.6%
どちらでもない	15.5%
あまりおもしろくなかった	5.3%
全くおもしろくなかった	9.0%

### 4. 卓球の魅力(卓球が面白かったと回答した人)

表4は、卓球が面白かったと回答した人に対して、卓球のどのような所が面白かったのかを表したものである。その結果、「ラリーが続いたとき」(39.3%)が最も多く、その後「スマッシュを決めた時の爽快感」(27.6%)、「相手との駆け引き」(15.2%)、「ボールに回転をかけること」(11.7%)、「その他」(6.2%)という順になっている。

表4 卓球の魅力（体育の授業やクラブ活動で卓球の経験者）

ラリーが続いた時	39.3%
スマッシュを決めた時の爽快感	27.6%
相手との駆け引き	15.2%
ボールに回転をかけること	11.7%
その他	6.2%

## 5. 卓球の魅力（卓球が面白くなかったと回答した人）

表5、卓球が面白くなかったと回答した人に対して、卓球のどのような所が面白くなかったかを表したものである。その結果、「ラリーが続かないから」（43.2%）、が最も多く、続いて「運動量が少ないから」（22.7%）、「試合で勝てないから」（15.9%）、「地味でマイナースポーツだから」（9.1%）、その他（7%）、「ボールの回転のかけ方がわからないから」（2.3%）という順になっている。

表4と表5の結果から、卓球を楽しいと回答した人の中で最も多かったのが、「ラリーが続いた時」で、一方卓球が楽しくなかったと回答した人の中で最も多かったのが、「ラリーが続かないから」という回答であった。つまり、卓球に初めて触れる人や初心者の人に対して、卓球の魅力を伝えるためには、ラリーを続けさせてあげることが、一つのポイントとして考えられる。

表5 卓球の魅力（卓球が面白くなかったと答えた人）

ラリーが続かないから	43.2%
運動量が少ないから	22.7%
試合で勝てないから	14.9%
地味でマイナースポーツだから	9.1%
その他	7.0%
ボールの回転のかけ方がわからないから	2.3%

## 6. 卓球観戦経験

表6は、リオオリンピックで卓球競技の番組を見たかについて尋ねたものである。その結果、「見た」が（37.8%）、「少し見た」が（36.2%）を示し、約70%以上が観戦し

ており、「全く見ていない」が(25.5%)となった。

近年ではオリンピックや世界卓球がメディアから取り上げられ、ゴールデンタイムの時間に放映されることが増えてきていることが、大きな要因であると考えられる。また以前と比較しても、卓球選手が様々なジャンルのテレビ番組に出演する機会が増えてきており、今後さらに卓球観戦者の増加が期待できる。実際、1月に行われている全日本卓球選手権大会の観戦者も、年々増加傾向にあると報告されている。さらに観戦者の中には、卓球経験者だけでなく、卓球を全くしたことがない人の観戦者も多数いると言われており、卓球人気の高まりが感じられる。

「見るスポーツ」の視点を考えた場合、メディアとの融合は非常に重要である。

表6 卓球観戦経験

見た	72 (37.8)
少し見た	68 (36.2)
全く見ていない	48 (25.5)

注) ( )内は比率 (%) 表す。

## 7. 卓球のイメージ変化

表7は、リオオリンピックをテレビで観戦した人に対して、テレビを見る前と見た後で卓球に対するイメージが変わったかを示したものである。その結果、「少し変わった」(25.7%)、「かなり変わった」(13.4%)とイメージの変化を感じた人は、全体の約40%であった。一方で、「あまり変わらない」(42.2%)、「全く変わらない」(18.7%)と回答した人が約60%であった。

さらに卓球に対するイメージが変わった人に対して、どのようにイメージが変わったのかを自由記述で回答してもらったところ、「地味なスポーツだと思っていたが、魅力を感じた」、「思っていたより迫力があつた」、「ラリーが続いてすごい」など、肯定的なイメージの変化を感じた回答が大部分を占めていた。国際卓球連盟は、卓球が観客にとって魅力的な競技と感じてもらうために、ラリーの回数を増やすルール変更を検討してきた。その大きな改革の一つがボールの大型化であった。2000年に38mmボールから40mmボールに変更したことである。ボールが大きくなった分、ボールへの空気抵抗が増え、ボールのスピードが少し減少したことによって、以前よりもラリー

## 卓球に関する意識調査（勝・朴）

が続くようになった。またその他にも、2001年には、1セットが21点制から11点制に変更され、観客によりエキサイティングな試合を見てもらうようにした点なども卓球のイメージ変化にプラスの影響をもたらしたのではないかと推察される。

表7 卓球のイメージ変化

かなり変わった	13.4%
少し変わった	25.7%
あまり変わらない	42.2%
全く変わらない	18.7%

### 【要約と課題】

本研究では大学生192名を対象に、卓球に関する意識調査を実施した。調査結果の概要は次の通りである。

- (1) 卓球に対する関心は、関心がある人が全体の約50%を占め、関心がない人は30%、どちらでもない人は20%であった。
- (2) 卓球に触れる機会については、年代が上がるごとに卓球に触れる機会が増えている。小学校の課外活動では、卓球クラブがあったと回答した人が約45%だったものの、小学校の体育の授業で卓球があったと答えた人が全体の約30%であり、50%以上がなかったと回答しており、小学校で卓球に触れる機会がメジャースポーツと比較すると、若干低い結果となった。
- (3) 卓球を印象については、肯定的な印象を持った人が全体の約70%を占めていた。しかしながら、30%の人は卓球に対して肯定的な印象を持たなかったことを考えると、卓球の導入段階の指導をどのように行うかを検討する必要がある。
- (4) 卓球の魅力については、卓球を楽しみと感じた人の回答で最も多かった回答が「ラリーが続いた時」であり、楽しくないと感じた人の回答で最も多かった回答が、「ラリーが続かないから」であった。この結果から、卓球の魅力を伝える上で、「ラリーを続ける」ということが重要な要因の一つであるということが言える。
- (5) 卓球観戦経験については、リオオリンピックの卓球番組を観戦したという人が約70%を占めた。近年卓球がメディアから取り上げられる機会が多くなったことも



影響しており、今後も卓球観戦者の増加が期待できる。

(6) 卓球のイメージ変化については、テレビで卓球を見たことによって卓球のイメージが変わったと回答した人が、約40%であった。さらにイメージの変化を感じた人の多くは、肯定的なイメージ変化を感じている人が大部分を占めており、これは近年国際卓球連盟が観客視線を視野に入れたルール変更が、卓球のイメージ変化にプラスの影響をもたらしていると考えられる。

本報告は、大学生が卓球に対してどのようなイメージを抱いているかを把握することに主眼を置き調査を行った。全体的な結果としては、卓球に対して肯定的なイメージを抱いている学生が半数以上を占めていた。しかしながら、現在の日本のスポーツ界は、野球やサッカー等のメジャースポーツへの関心が高く、平田(2000)の報告においても、最も関心のあるスポーツ種目として「野球」を挙げている。その理由としては、メディアの中での扱いの大きさが理由の一つとして考えられると示唆している(平田, 2000)。この点を考えると、近年卓球は、メディアから取り上げられる機会が増えてきており、今後卓球に対する関心が高まっていくことが期待できる。

また今回の調査で卓球の魅力を伝える上で、「ラリーを続ける」ということが重要な要因の一つであるということが明らかとなった。卓球というスポーツは、サッカーやバスケットボールなどのスポーツと違って、長時間走り回るわけではなく、また野球などのように速くまでボールを投げたり、打ったりするわけでもない。卓球台は、幅が152.5cm、長さが274cm、高さが76cmという限られた空間の中で、真ん中にネット挟んでお互いにボールを打ち合う。さらに、相手が打球した卓球のボールというのは1秒間に何十回転も球が回転すると言われており、ラリーを続けるためには、ボールのスピンのスピード、台との距離感など、様々なことを考えて、自分のラケット角度を調節して打球する必要がある。そのため、卓球に初めて触れる初心者に対して指導者は、どのようなことを意識すれば初心者でもラリーが続くようになるかという指導法を検討する必要があるだろう。

また、現在スポーツの低年齢化が進んでおり、今後卓球人口の増加のためには、できるだけ早い年齢の時から卓球に触れる機会を作る必要がある。しかしながら、今回の調査では、小学校の時に卓球に触れる機会が、他のメジャースポーツと比較しても少ないということが考えられるため、小学校やさらには、幼稚園の時から卓球に触れ

る機会をもっと作っていくが重要といえる。しかしながら近年、子供の体力・運動能力が低下傾向にあることや、運動する子供としない子供の二極化の傾向なども問題視されていることから、指導者は地域のスポーツ少年団との連携等も視野に入れて、卓球の普及に取り組んでいく必要がある。

今回の研究は大学生の卓球に対するの意識調査だけに絞って行ったため、今後は他のスポーツとの比較や男女差による違い、年代による卓球のイメージの違いなど、様々な観点から検討を行う必要がある。

### 【参考文献】

- ・松井 匡治「運動部活動に関する実態調査」『仙台大学紀要』第24集 1993 pp.127-153
- ・松井 匡治「運動部活動に関する実態調査(2)」『仙台大学紀要』第25集 1994 pp.103-124
- ・三戸 範之・浦井 孝夫「大学生の体育・スポーツの意識に関する研究：興味・関心及びイメージについて」『秋田大学教育学部研究紀要』 48 1995 pp.81-90
- ・平田 忠「スポーツイメージに関する研究(1) 日本人大学生によるスポーツのイメージ」『仙台大学紀要』第31集 2000 pp.47-58
- ・佐藤 誠・福田 馨「生涯スポーツの意識に関する研究」『九州産業大学健康・スポーツ科学研究』 2 2000 pp.1-27
- ・須藤 春夫「スポーツとメディアの融合 - スポーツコンテンツの問題性 -」『スポーツ社会学研究』13 2005 pp.23-37
- ・吉田 和人「生涯スポーツのための卓球テキスト 新装版」三省堂 2010
- ・林 園子「高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究」『法政大学体育・スポーツ研究センター紀要』 31 2013 pp.57-65
- ・公益財団法人日本卓球協会「日本卓球ハンドブック 平成28年版」 2016
- ・スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」 2016

### 卓球に関する意識調査

- Q 1. 卓球についてどの程度関心がありますか？
- 1 大変関心がある
  - 2 少し関心がある
  - 3 どちらでもない
  - 4 あまり関心がない
  - 5 全く関心がない
- Q 2. 小学校のときに体育の授業で卓球の授業はありましたか？
- 1 あった
  - 2 なかった
  - 3 覚えていない
- Q 3. 小学校のときに課外活動(特別活動)で、卓球クラブはありましたか？
- 1 あった
  - 2 なかった
  - 3 覚えていない
- Q 4. 中学校のときに運動部活動の中に卓球クラブはありましたか？
- 1 あった
  - 2 なかった
  - 3 覚えていない
- Q 5. 高校のときに運動部活動の中に卓球クラブはありましたか？
- 1 あった
  - 2 なかった
  - 3 覚えていない
- Q 6. これまでに体育の授業やクラブ活動などで卓球を行ったことがある人にお聞きます。卓球をやってみてどのように感じましたか？
- 1 すごくおもしろかった
  - まあまあおもしろかった
  - 3 どちらでもない
  - 4 あまりおもしろくなかった
  - 5 全くおもしろくなかった
- Q 7. おもしろかったと感じた人にお聞きます。どのような所がおもしろかったですか？最も当てはまるものに○をつけてください。
- 1 ラリーが続いたとき
  - 2 スマッシュを決めた時の爽快感
  - 3 相手との駆け引き
  - 4 ボールに回転をかけること
  - 5 その他【 】

卓球に関する意識調査(勝・朴)

- Q8. おもしろくなかったと感じた人にお聞きします。なぜおもしろくなかったですか? 最も当てはまるものに○をつけてください。
- 1 ラリーが続かないから
  - 2 運動量が少ないから
  - 3 地味でマイナースポーツだから
  - 4 ボールの回転のかけ方がわからないから
  - 5 試合で勝てないから
  - 6 その他【  】
- Q9. リオオリンピックで卓球競技の番組を見ましたか?
- 1 見た
  - 2 少し見た
  - 3 全く見ていない
- Q10. テレビを見る前と見た後で卓球に対するイメージは変わりましたか?
- 1 かなり変わった
  - 2 少し変わった
  - 3 あまり変わらない
  - 4 全く変わらない
- Q11. 変わったと答えた人は、どのように変わりましたか?
- 【  】